

會報

才三卷 才十一号

(Mar. 1959)

— 目 次 —

1. 真珠業界の現況と今後の問題点について	山本 勝	1
2. 真珠の化粧巻漁場の意義と予備試験	片田 清次	6
3. 「卵抜き法」の差異が真珠の 品質に及ぼす影響	蓮尾 真澄	10
4. 真珠雑感(VI) 貝掃除	山内 栄	13
5. 真珠研究会九州部会に出席して	太田 繁	17
資 料		
養殖業界時事ニュース		19
会 報		24
雑 報		26
33年度決算報告書、予算書		27

真珠研究会伊勢部会

研究会風景



一月研究会
試験養殖に関する発表
(木村技師)

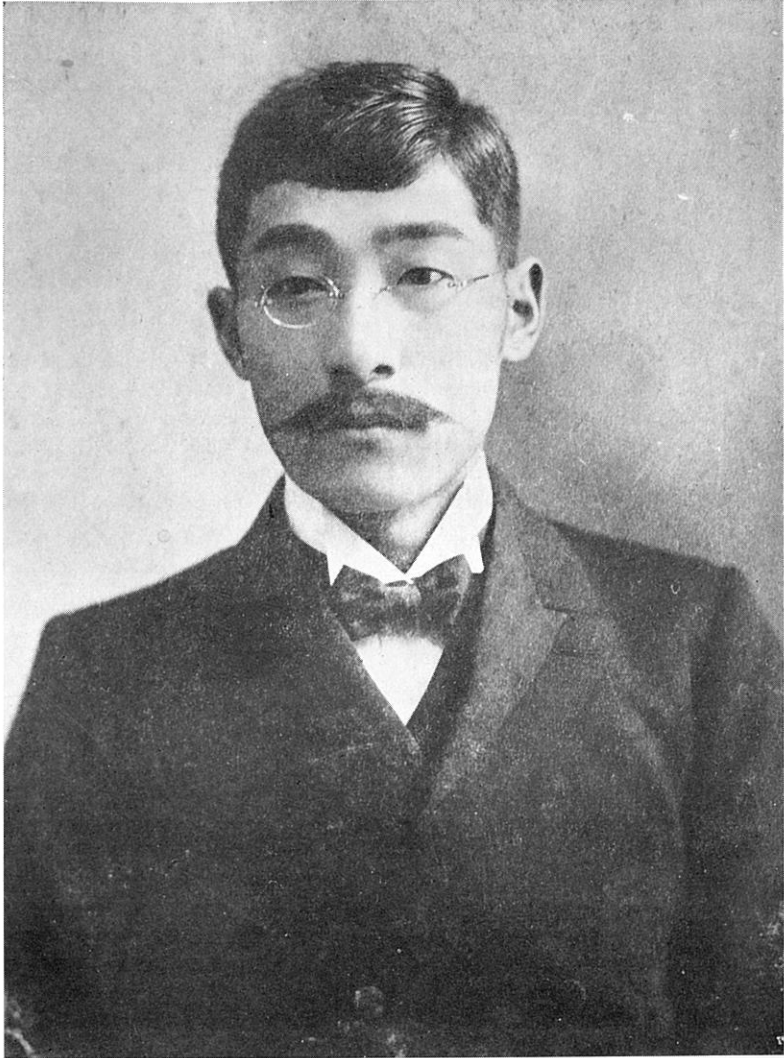


三月研究会
松尾組合長の
業界の現況に
関する講演



三月研究会
東京水産研究会
浅野会長の
センサス報告

見瀬辰平氏



見瀬辰平氏の業績

見瀬辰平氏は、三重県志摩郡の矢に生まれ、すでに明治33年頃から真珠の研究について画策するところがあつたといわれる。同氏の業績としては、明治35年以後数次に亘る英虞湾よりの矢湾への真珠貝の移殖等についても見逃すことはできないが、去る昭和32年10月真円真珠発明50周年を記念して建てられた発明者頌徳碑にその名を記されているごとく、真円真珠養殖技術の達成を担う先覚者としての立場において見るならば、まず第一に注目すべきは、明治40年に得たところの特許第12598号「介類ノ外套膜内ニ真珠被着用核ヲ挿入スル針」であろう。すなわち、それは、同特許が真円真珠の産出を技術的に最も早く実現した技法の一つであるというのみならず、その特許明細書中に「介類ノ外套膜組織内ニ核ヲ挿入シテ之ニ真珠質ヲ被着セシムルニハ挿入ノ際ニ外皮細胞ノ幾分ヲ核ニ伴ハシムルコト最モ必要ナリ」としている点、現行の真珠養殖技術において本質的な基礎的知識であるところの真珠袋の組織を構成すべき起源としての外套膜上皮組織の重要性を最も早く認識していた一人であることを意味するものだからである。事実、同氏が当時その認識に到達していたことは、上記にひきつづき出願された「特許願第38318号真珠人工形成法（明治40年5月13日付出願）」が、西川藤吉氏の「特許願第40219号真珠形成法（明治40年10月23日出願）」と抵触するものとして特許局により査定されている点に徴しても明らかである。この抵触査定をめぐつての係争は、発明期日の先後を争つて翌41年9月まで続けられたが、ようやくして見瀬、西川両氏の調停が成り、西川氏を発明人かつ出願人として特許権を獲得せしめることに解決を見ている（この抵触査定に該当した部分は、後に特許第29630号一特許権者西川真吉一の内容をなしている）。

見瀬氏はこの後も上田元之助氏等と共にさらに研究を続け、その成果は、下記のごとき一連の特許として結実している。

特許第30011号 真珠形成核挿入器

大正5年9月11日特許

特許権者（発明者）見瀬辰平、上田元之助

特許第31270号 真珠形成核挿入法

大正6年7月5日特許

特許権者（発明者）見瀬辰平、上田元之助

特許第37746号 球形真珠形成法

大正9年12月24日特許

特許権者（発明者）見瀬辰平、上田元之助

このうち特に特許第37746号は「誘導式」と呼ばれ、当時の代表的な真円真珠形成法の一をなしたものである。

その他、同氏は、明治40年旧大村藩主を中心として設立された大村湾水産養殖所（後の大村湾真珠株式会社）に懇望されてその技術指導に当り、大村湾真珠養殖業の開拓にも尽して力があつた。しかし、同氏自身の計画した養殖事業、すなわち明治44年の見瀬真珠株式会社の創立その他は、ことごとくその意に反して途中で挫折し、その意味では比較的恵まれぬまゝその一生を終つている。

真珠業界の現況と今後の問題点について*

山 本 勝

(全国真珠養殖漁業協同組合常務理事)
(市価安定対策委員長)

私は只今、組合長が申された如く、全国漁協の理事でもありますが、昨年の秋、業界上層部の要望がありまして市価対策委員長の指命を受けましたが、何等取るべき仕事もやつていない事を反省と御詫びをするものであります。

しかし、こゝ現実直面に皆様真剣にこゝの集荷の問題で協議を願うという前提として、今迄のあり方、又今後のあり方に對して私の経験或いは海外の事情又こし来つた過去の問題これ等を一応断片的ではありますが、皆様にお聞き願つてその上で今後の業界の推進を協議して頂きたいと思ひます。

「前組合長、幹部役員及び組合員の皆様の御尽力によつて一つの大きなエポックを獲して此処に集荷買取という事をやつたのでありますが、この事については過去三ケ年、業界に於ては非常に大きなプラスと安定を来してくれたのでありますが、これは我々業者の一番困つている問題を解決する一方法であつたと思ひます。要するに皆様の作つたものを秋から春にかけて一時的に採集されてくるので、この様なものを一応プールする所がないと現在の加工能力では抱ききれないという事がこの業界の一つの隘路になつているのであります。」

それ故、これを農中の枠によつて資金を得て此処にプールするという事が理想であります。我々がこの仕事を伸ばして行くのには是非とも、その為の資金が必要であると思ひます。

この様な理念の下に組合が現在の形を辿つてきたのであるが、とりもなおさず、この組合のやつた事は業界全部が賛成してゐるのであります。只過去に於いて種々のいきさつもあり、それに対しては私達も多少批判的な立場で物を言つた事もありますが、現実こゝなつた以上は外にどの様にこれを打開するかという道は現在の我々の力では此処の漁協に頼る外はないという考えの下に市価の対策という事に對しても私達は考へております。

本年種々の事情がありまして組合にも予想以上の集荷がありましたが、これは此処に集る事が幸か不幸かという事はこれから討議されて行く滞荷の問題によつてあらわれる事ですが、「何故此処にその様に滞荷がおきたかと言

* 3月18日役員会説明要旨

いますと、要するに2千何百軒の養殖業者が一つの方向のない仕事をしている結果が現在の滞荷になつたと言えらると思われます。」この問題は却々大きく難かしいものでありまして簡単に我々が自主的に規制する事は至難な事だと思ひますが、まず此処に寄つて頂いてゐる方は自分の地区に歸つて自分の範囲の人々によくこの事をお話し願つて本年直ちに再開される施術シーズンに向つて皆様が業界のあり方を末端の業者迄知らしめる事に於いて多少でも規制して行くという事でなければ、この業界は自主的に伸びないという事が言えらると思ひます。

バランス的な事で言えば組合に残つてゐるものは5ミリ6ミリというものであるが、昨年夏私の名前で漁協を通じて皆様に本年の採集見込高を統計してみました、その時既に現在の予想はしておりました。というのは、現実的に品物が對外的に売られてゐるのはどうだという事も我々輸出面で過去1年のデータをとつて集計してみた結果と皆様の報告を合せて見て既に5ミリは市場の要求の倍あり、又6ミリは一昨年産額の倍であるという事から推してこれは滞荷すると思つておりました。

滞荷したものをどの様にして行くかという事については却々業界の種々の経済的な事情がありまして、そう簡単には解決するに安易な方法はなかつたのであります。「幸いな事はこの大きな組合が農中のバックアップを得てゐるという事が現実何億という金を出して貰つて皆様の品物が此処にプールされてゐるという事が実は業界にとつては一番の大きな幸ひであつたと思ひます。もしこれが組合がなくあのシーズン期にあれらの品がストレートに我々加工業者に流れたとしたら恐らく今日の安定はなかつたと思ひます。むしろ大混乱を來していると思ふ。」然らば現在のストックをどの様に処理するかという事になりますが、これは技術的な問題で皆様によつて討議せねばならないが、少くとも我々がやつた事でありますから我々が責任をもつてこれを消化するという前提の下に物を考へて行かねばならないと思ひます。その意味では組合員、或いは幹部丈でなしに少くとも業界の主だつた方々にはこの思想は行き渡つておひます。多少でも我々の及ぼす丈の力で多少損はしてもこの漁協のものを買おうという意気込でありますが只、私の立場としては高いものを押しつけて後でそのものゝ個人的な損は別として残つたという事になれば困るのであります。乃ち全部この品物が売れるかという事と少くとも9月迄入札をやつて行つても6~7億のストックが吹き、残つた品は秋にどうするかという事になると却々良い策がないのであります。という事は結局既に海にある品物が秋に揚つてくればストックされた品物は当然売れなくなる。此処の品物は我々の責任に於いて売らね

ばならないという考えでなければこの業界は今後生きて行かれないんだという切実な考えでこの問題をよく討議して頂いて現在のストックを秋の品物とにらみ合わせてどうして行くかを決めて頂きたい。

對外的に5~6ミリが半分づつ残るといふ事は数的に言えば「大体本年9千貫位あるという昨年の予想でその内5ミリが大体3千貫、6ミリが3千貫位あがつている。結局全体の数量の6割5分も占めているといふ事が言えるのであります。従つて7ミリ以上の珠は非常に少なく一昨年の7ミリは1,200貫、昨年度は1,000貫そこそこでないかと思つておりました所、適中しましてやはり7,8ミリも現在の量では對外的な要望を満せない有様であります。結局、アメリカ、ヨーロッパの流行が5、6ミリには余り興味が無いといふ事が現実に滞荷した理由でありまして、従つて値を下げるという結果になつております。」但し我々が予想しなかつた事は漁協の建てた値が市価と余りにも開きが大きすぎた事が漁協の品を余分に滞荷させた事にもなつていると思ふ。業者の声を聞いてみますと漁協で420円で買つて貰うのだからこれを八掛で売つたらよいだらうと思つて八掛で売つている。

それが段々下がつて来て昨今では5ミリが230円、6ミリが380円迄になつております。これはむき落しではなくスソは2割~2割5分も取り除いたものであります。それ故実際の時価といふものが遊離してしまつております。だから益々漁協のものが入札会にかけても売れないという結果になつているわけで、これは「業者間の一つの種々の事情がこの漁協の施策と市場との使い分けが余りにも激し過ぎたといふ事が言えると思ひます。100%漁協に品物を出された方は或る意味では協力者であるし、この人達の期待に反く事は非常に遺憾だと思ひますが、種々の都合で此処には一部出してあとは換金を急ぐので無定見に安く売つたといふ事が本年こうなつた一因であると思ひます。」何故なれば我々は決して5ミリを230円で買ふという様な事はしない。少くとも業界で對外的に信用のある加工なり輸出なりやつている方が5ミリが高いから下げろといふ様な声で物を買つた事はないと思ふ。只皆さんが勝手に値を下げて来る一こゝに大きな業界の問題があると思ふ。こういう様な事であれば如何なる施策をしても結局、この施策が宙に浮いてしまう。多いといふ事はまずこちらの宣伝もよくして多いものをどうするかといふ処置に對しても協議する機会がなかつた事も一般業界で少くとも上の仕事をしている方の責任もあると思ふが却々至難な問題で、この仕事に携つている方々は決して自分の時間といふものはありません。この仕事の特異性が全く他人に任せるといふ段階に迄成長している所は御木本以外にはないと思ひます。この様な仕事の忙しさが一つの反省の機会とか

話し合う機会が少いことになっております。

今後ともそういう問題がこの業界につきまとつているという事が言えますが、然らばこの様な現実直面してこの仕事が悲観的であるかという事と決してその様な事はないという事も一応御承知願いたい。

他の中小企業が一つの企業体の下にあつて輸出をやつているが、これらが不当に値を下げて輸出を行つている。これは国内での競走が先方の要求以上に品物を安くして行く原因である。幸いに真珠は輸出をやつている方が実際には三百何十軒ありますが、その中の僅か20人足らずの者で75%位輸出している。この事は僅かな人間でやつている為に割合競走というものがないというのは仕事の特異性であり夫々自分の所の持味というのが幸いて少くとも終戦後約十倍以上に伸びている輸出が案外に競走がない。それ丈に我々は救われているのだと考えていると思います。

一昨年の820円平均の輸出が本年700円になつているが、輸出の量に於いては一昨年は7,300貫、本年はこの3月で恐らく9,000貫近いといえる。金額的には1割だが、量的には3割の伸びである。この様な事を考えてみるとこの業界は世界中で最も恵まれていると思います。この観念を以つてこの仕事を熱を持ってやつて貰いたい。しかし乍らこれらの業務に携つている人の仕事振りをみてみると非常にいかな状態が見られる。これは「養殖事業で儲るという事はもう三重県でも全業者の1割しかないと断定してよい位でわないかと思う。然らば今後生産の規制もなく、このまゝ放置して我々が現在の細そのものよりも出る事は到底至難な事ですが、このまゝで行けば必然的に我々はどうしても生産オーバーして来る。思いきつて生産を半分なり3分の1にすれば努力しなくて過去の利益率をあげる事が出来ますが、現在では出来ない。しかし少くとも今迄10万だったものを20万にしてよりよく利益をあげようという考え方は時代遅れだという事を本年4月以降の養殖に携わる計画として是非ともこの規制という事を頭に入れて頂きたい。」これはむずかしい事ですが、英虞湾の現状で恐らく自滅の一途を辿るという事、これは自家崩壊であります。

偶々本年の問題である5~6ミリのアンバランスの事ではありますが依然として7ミリ以上の需要を満す事は出来ないが真珠そのものの全体を見れば決して批判すべき状態ではないのであります。このアンバランスは要するに皆様の資金問題とか、又換金を急ぐという事によつて多数出きているという事が言えるのであるが、兎も角本年の集荷をみると非常に薄くなつてきている。薄いために我々の要望する品質がありません。この漁協に於きましても見るべき品物は恐らく2%もないと思います。厘珠の例をみても我々は1,800~2,000円のもの欲

しいのですが、これに該当するものは一品もありません。これは皆様によく考えて貰ねばならない事だと思います。漁場が狭くなり且密殖しているから良いのが出来ないのだという考え方で行く事が果して自分等の幸福になるか………という事であります。これを切実に考える事によつて自制するより外に対策はないと思います。大きな力で規制するという時代ではありません。

又その様な事態になれば又別なものと大きな事で苦しまねばなりません。幸い終戦後非常に自由に仕事が出来た事自体が幸福な事であり、これを如何に自分達が規制して行くかという事に責任があると思います。

「非常に珠が悪くなつています。だから1割5分も値が下つたという事は市価が下つたのでわなくして品物が落ちたと見た方が恐らく間違いないと思う。だから今迄10貫取つているものが20貫とつても結局採算は合わない。」

種々な点で我々の考え方が国際的に浅いのも事実である。だから「自由に三人のバイヤー等の人々が非常に有利な立場で仕事が出来た事になつている。こういつた難かしい問題が多々ありますが、これは決して他から規制出来るものでなく、自分達自身がよりよく縦横の連絡を密にして自主的に仕事をして行くという以外にないと思います。」から先ず生産そのものを如何にして行くかという事は皆様が真剣に自分達で立て直すという積りでないと、いつかは自滅すると見て間違いないと思います。

決して對外的に輸出するのに困つているという事ではなく要するによりよき供給を願うという希望が大きい。アメリカが多少本年は予想以上利益も上らず、不景気ではありますが、アメリカの景気、不景気に拘らず真珠そのものは極東ブームというか興味を持つている。又ヨーロッパに於きましても種々フランスの政変とか経済的な不景気とか又西欧諸国も経済的には決して良い国ではないと思いますが、割合に真珠の要望が多いのであります。一部フランスが本年フランスの切り下げによつて日本円とのバランスによつてフランスへは余り品物が売れませんが、従来フランスに行つていた量は知れておりますのでその点は余り心配はありません。

それとブラジルもアメリカの南米政策というものが、他の問題で忙しかつた為に南米の余剰産物を買わなかつた為にブラジルの貨幣が平時の半額になつていたので真珠も行きにくいという事情もありまして金色系統は非常に至難な道を辿つておりますが、金色そのものが大体浜揚の1割位のものですから大した影響はないと思います。

この事は本年の秋頃から復調すると思います。アメリカは太いものを要求しておりますが、薄くても傷のないものという事をくり返し言つた為に今日の様

な結果になつたのだと思います。「アメリカも真珠を扱う様になつてから少くとも10年にもなり真珠を見る目も出来てきた事と思いますので今後やはり厚い品物を作るという事に努力しなければならない」と考えています。

私もこの入札会へ来て大分買っていますが、決して自分の利益のみで買っているのではない事を断言します。というのは此処で買わなくても他所で沢山買えます。ですが少くともこの入札会が始まつて以来、私は欠勤した事もなくいつも4割近くのものを買ひ占めています。これは何故やつているかという一つの信念を持つているからであります。皆様のお蔭で自分はこれ丈になつたのだと一。だから自分が尽すのは決して個人的なもので尽してみた所で仕方がない。少くとも公の機関で自分が出来る丈の範囲で努力する事によつて皆様に尽せるという考えを持つているのであります。幸い今後も皆様が集荷された品に對しては一生名付親になる丈の自尊心を持つております。ですから此処で間違つて安く評価されて売られても決して皆様の損にはならないと言う……事が言えます。市価で3,000円の品物でも私は此処で4,000円あると思えば4,000円で買つています。というのはこの事によつて皆様に少しでも珠の真価というものを知つて頂きたいからであります。

以上断片的であります但し現況を述べさせて頂きました。

真珠の化粧巻漁場の意義と予備試験*

片 田 清 次

(国立真珠研究所大村支所)

真珠養殖業における漁場の優劣は、たゞちに生成される珠の品質に影響を及ぼすものと考えられているので、その選定は重大関心事の一つである。

昐矢養蠶研究所長の佐藤氏は、三重県の漁場について、一般に南部の外海性の強い漁場において生産される真珠は、巻きはよいが色はクリーム系で光沢少なく、北部の外海性内湾の兩性を帯びた昐矢湾の珠は、ピンク系の色調強く光沢もよいので品質として優位であると述べている。

* 「しんじゆ」第38号より

また当所の「大村湾内養殖場の環境と真珠の色および巻きの関係」の試験は、色の出現率は養成環境によつて異つている傾向にあり、巻きの状態は湾口部附近において良好で、湾奥部ではやゝ劣ることを指摘している。

真珠の化学成分の分析では、良質珠と劣質珠との間には著しい差はみられず、主成分の炭酸カルシウム及びその他の無機成分としてのマグネシウム、鉄、燐、珪素などの微量元素の含有量は真珠の良否とは全く関係ないものと見られている。たゞ真珠の中に含まれているコンキオリン（真珠を塩酸などの酸に溶すと、あとに不溶性物質としてコンキオリンが残る）と言う蛋白質の含量は、真珠の優劣によつて異つていて、劣質の珠が良質のものにくらべて著しく多い傾向にある。一般に成長の盛んな時の真珠は、無機物質に較べてコンキオリンの沈着が多く、所謂ボケ珠となる傾向にあると言われている。

佐藤氏の「珠の形成は6~9月の4ヶ月に行われ、色沢は9月以降に生成されると考える。即ち珠の色調は8月はクリームで光少なきも、9月に入ればにわかにか光が加わり色も鮮明となりピンクの色調が出て、10月以降はピンクの出現率は増加し光も増して、的矢湾独特の珠が完成される」と述べているのは前述の説明を裏書きしているように思える。

なお冬季に行われる真珠の浜上げや、暖かい外海性を帯びた海域でしばらく養成した施術貝を一度比較的冷い海域に移した後に採珠すると良質の真珠が得られるということが経験的に考えられ行われているのも、要は蛋白質の沈着を制限して、真珠の光沢を調節する巧妙な方法であると田中正三氏は述べている。

三重県の英虞湾では、現在養殖漁場が飽和状態となつているので、盛んに新漁場への進出が目立っているが、新漁場が化粧巻漁場としての条件を必ずしも満足しているとは限らないので、この種の研究に對しては強い熱意が払われているようです。

本県においても、この問題に就いて関心をもたれている方々はかなりあるように思うが、新漁場設置の困難性や比較的漁場面積に余裕があるためか、三重県に於けるような研究は行われていないように考えます。でも大村湾内の養殖場は次第に湾口部附近へ、更に外海へと進出している傾向にあることを考えると、この問題はもう一度本県に則した方法で再検討してみる必要があるのではないかと考え、昭和33年に予備試験を試みた訳です。

化粧巻漁場の利用は一般に大珠、中珠に對して行われ、挿核後の一定期間を暖海で過ごし、採珠前の1年間を化粧巻漁場で養成しているのが普通のようにですが、今回は予備試験と言うことゝ、又色調が9月以降に現われるとの意味合いから当年ものを使用してみた。

試験方法は外海に位置するA漁場において、33年4月中旬に1.3~1.6分核を挿核し、それを同漁場で9月迄養成し、9月17日に大村湾内のB・C漁場に移殖した。移殖後は環境条件以外は一様化するために金網籠(13掛)を使用し、吊線の長さを9尺とすることによつて各漁場とも垂下深度を一定にするようにした。移殖後浜上げ迄は貝掃除は行わず12月25日に金網籠だけを交換した。

なお、養成期間中は、月3回宛垂下層(2米)の水温測定と採水を行ない、塩素量を定量し、標準比重(15度)に換算して示した。

浜上げはAは34年1月21日、Bは1月23日、Cは1月上旬の寒波による斃死の危険を考慮して1月8日に行つた。

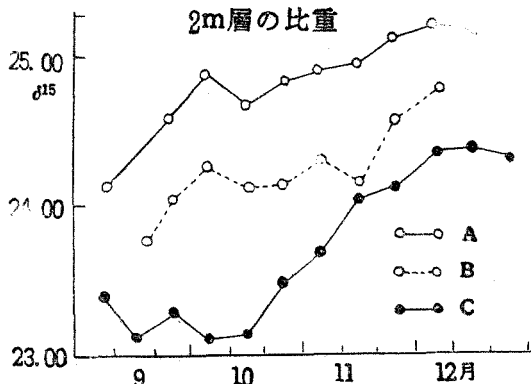
Aは外海に面した海域にあり潮の干満の差は大きい。水温は夏季にはB・Cに較べて低めであるが、秋季には逆となつており、所謂外海の性質を示している。

Bは大村湾口部に位置する浦内にあるので外海の影響も受けるが浦内に入り込んでいるので陸水の影響もかなり受けている。

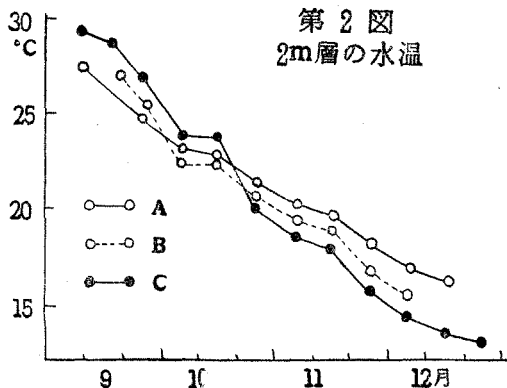
Cは大村湾奥部の玖島崎であるが、潮の交流は緩慢で、気象条件に左右され易いので、水温の夏季における上昇は顕著であるが、秋季の気温下降期にはその影響を受けて急激に下降の一途を辿つている。

真珠は屑、白珠(出現率に差はない)を除いた浜上珠について品質を比較した。

第1図
2m層の比重



第2図
2m層の水温



先ず販売不適格品として一応取除かれる程度の薄巻珠の出現率を比較すると第2表のようになるが、推計学的方法である X^2 一法によつて出現率の差の有無を検定すると、薄巻珠の出現率には差が認められ、Aに多く、Bに少ないと言える。

第1表 浜上珠出現率

品質 漁場	浜上珠	屑	白珠	取上珠 総数
A	83.9%	8.3	7.8	498ヶ
B	85.1	8.7	6.2	195
C	86.9	5.7	7.4	175

第2表 薄巻珠出現率

品質 漁場	薄巻珠	その他	浜上珠 総数
A	23.9%	76.1	418ヶ
B	13.3	86.7	166
C	17.8	82.8	152

次に色調別の出現率は第3表のようになり、検定すると漁場別に色の出現率には有意の差が認められる。即ちホワイト系はAが多くBに少なく、ホワイトピンクはCが多く、Aに少ないと言える。

以上の試験は一定期間養成した施術員を環境の異なる他の海域に移殖した場合に色の出現率にどのような差異が現われるかを試験し、ひいては化粧巻漁場の意義を追究するための予備試験であるが、これらの結果からも判るように、この問題は更に研究する余地があるものと考えられます。

なお本試験によつて得られた真珠をその方面の経験の深い3名の方々に評価して戴いたが、「Aにおける真珠は優劣の差が大きく、薄巻及びクリーム系の出現率が多く、全般的に色調は単純である。Bはピンク系多く、つやも良くて商品的に最上級のものが多い。Cは全般的には薄い傾向にあるが、つやは比較の出ている」。との肉眼的観察の一致をみている。

第3表 色の出現率

色 漁場	金色	クリーム	クリーム ピンク	ホワイト ピンク	ホワイト	黒	浜上珠 総数
A	9.1%	24.4	14.4	17.7*	21.5 Δ	12.0	418ヶ
B	6.0	19.9	21.1	22.9	12.0 Δ	18.1	166
C	5.3	19.1	15.1	27.6*	17.1	15.8	152

(同一記号間に差が認められる)

本試験は当年ものを用いての予備試験であつたが、更に大珠、中珠での試験を試みて、本課題の追究と、各漁場の化粧巻漁場としての適否を検討し、ひいては新漁場開発への足がかりが得られるようになるならば幸であると考えている。

「卵抜き法」の差異が真珠の品質に及ぼす影響*

蓮 尾 真 澄

(国立真珠研究所大村支所)

さきの「しんじゆ」第三十五号では、「卵抜きとアコヤガイの疲弊について」と題して、卵抜き作業が現行の真珠養殖様式においては不可欠の重要作業であるとは言え、母貝の健康状態に對しては好ましくない影響を与えるものであり、なお操作の相違によつても、母貝の疲弊の度合に差が現われることを杆晶体を指標として説明しました。

ところでそのような健康状態の異なる母貝を使つた場合には、挿核初期において真珠袋の形成に大きく関与し、ひいては真珠の品質にまで影響を残すのではないかと考え、地活け法・浅吊り深吊り法(A)・同法(B)の夫々異なる操作を経た三群の母貝に5日間の養生期間を与えた後、昭和33年7月下旬に挿核を実施し(1.2分核2個入れ)、以後の管理状態は全て同一となるようにして養成(貝掃除は9月中旬、10月下旬の2回実施)、昭和34年1月下旬に浜揚げを行ない、その結果を検討する機会を得ましたので、概要について述べてみたいと思います。(註一卵抜き後の5日間の養生期間では杆晶体の伸びはみられず、このことから考えると貝の健康回復の面には必ずしも寄与しているとは思われない。又挿核時における三群の各母貝の杆晶体の長さの相互間には、夫々有意の差が認められる。即ち母貝の健康状態の差異が挿核時にも残っている)。

1. 色の出現率

浜揚げ珠を各処理別にホワイト系・クリーム・ゴールド・グリーンに分けて、その出現状態を示すと第1表のようになります。処理方法によつて色の出現率に差があると云えるかどうかを X^2 —法により検定してみますと、5%以下の危険率で有意の差が認められる。更に分析すると、地活け法と浅吊り深吊り法(B)との色の出現率に有意の差が認められ、所謂ホワイト系は地活け法に多く、クリームは浅吊り深吊り法(B)に多く現われるという結果が得られた。

(他の色については有意の差が認められない)。これは一般には、強い貝からはクリーム系の珠が多く出来、貝が弱い場合はホワイト系の珠が多いと言われていたのと一脈相通ずるものがあるのではないのでしょうか。

* 「しんじゆ」第39号より

第1表 色の出現状態

色別 区分	ホワイト系	クリーム	ゴールド	グリーン	計
	地活け	83個 51.3%	55 33.9	18 11.1	
浅吊り深吊り(A)	56 41.5	58 43.0	13 9.6	8 5.9	135 100
	〃 (B)	46 32.2	65 45.4	20 14.0	12 8.4

2. 巻きについて

浜揚げ珠を各処理別、色彩別に分類、秤量し、1個平均の重量を示すと第2表の通りになります。二元配置法により検定すると、5%以下の危険率で有意の差があります。

つまり、卵抜き操作の相違（挿核時の母貝の強弱といつた方がびつたりするかも知れません）は、巻きに影響を与えることが判ります。これを分析すると、地活け法と他の二方法の間には、夫々有意の差があり（危険率5%）、浅吊り深吊り法Aと同Bの間には、有意の差が認められません（危険率5%）。これは、地活け法による母貝を使用した場合は、浅吊り深吊り法によるものよりも巻が薄く、浅吊り深吊りの2つの方法間では、どちらが巻が良いとも悪いとも云えないということを意味しております。

第2表 巻きの状態 (g)

色別 区分	ピンク	ホワイト	クリーム	ゴールド	グリーン
	地活け	0.113	0.100	0.106	0.116
浅吊り深吊り(A)	0.116	0.108	0.106	0.127	0.113
〃 (B)	0.125	0.103	0.107	0.124	0.116

3. 瑕、しみ珠の出現率

瑕、しみ珠の分類方法も種々あると思いますが、取揚げ珠の総個数について、瑕の有無、程度（瑕の個数の面からみた）、しみ珠に瑕の占める程度（瑕の大小の面からみた）によつて分類し、その出現状態を各処理別に示すと第3

表の通りになります。例の如く、 X^2 一法により検定すると5%以下の危険率で有意の差が認められます。更に検定を進めると、地活け法にくらべて浅吊り深吊りAは2点以上瑕の出現率が大きく、同法Bは無瑕、1点瑕が少なく、2点以上瑕、しみ、小瑕が多く現われるという結果が得られた。このことは、貝が強いと瑕珠が多く、弱い貝に生成された珠には瑕が少ないということを裏書きしているのではないのでしょうか。

第3表 瑕、しみの出現状態

程度 区分	程度			しみ、大瑕		計
	無瑕	一点瑕	二点以上	しみ、大瑕	しみ、大瑕	
地活け	18個	36	58	19	42	173個
	10.4%	20.8	33.5	11.0	24.3	100%
浅吊り深吊り(A)	9	18	64	20	31	142
	6.3	12.7	45.1	14.1	21.8	100
" (B)	6	14	67	28	35	150
	4.0	9.3	44.7	18.7	23.3	100

4. 脱核率

取揚げ珠と脱核数の比率を第4表に揚げました。 X^2 一法の検定によると、有意の差はありません(危険率5%)。即ち、表をみた感じとしては、地活け法によるもの、脱核率が一番低く、浅吊り、深吊り法A・同Bと順次、母貝の健康状態が良好(杆晶体を指標として比較した場合)となるにつれて、脱核率が高いようにも思われますが、この程度の脱核率の相違では、差があるとは言い切れぬようです。

第4表 脱核率

区分	脱核率		計
	取揚げ珠	脱核	
地活け	198個	68	266個
	74.4%	25.6	100
浅吊り深吊り(A)	171	79	250
	68.4	31.6	100
" (B)	173	85	258
	67.1	32.9	100

以上の通り、卵抜き方法の違いが挿核時における母貝の健康の度合に差異を来たし、それは珠の品質にまで影響を残すだろうとの結果が得られ、更に、卵抜きの様式によつて、品質の各要素への影響の現われ方も異なり、夫々一

短があるように推察されますが、本試験に採用した「地活け法」・「浅吊り深吊り法」は現行法のうちでは、一応普遍的な基本型とも云えるものであるとはいえ、卵抜きの実情は各自の経験によつて、上記の方法の種々な組合せによつて行われているようですから、その結果は当然、珠への影響も様々な形となつて現われて来るものと思われまゝす。

珠の品質を決定付けるものとしては、多くの要素を挙げることが出来、それらの複雑微妙なる交互作用の結果によるものと考えられますが、良い条件の累積が必然的に良質真珠に直結することは論を俟たぬところですから、その要素の一つ一つが、ゆるがせに出来ない問題を包含しているものと思います。本題の場合も、仕事を計画通りに進めるためには、卵抜きの効果を如何にして大きくするかに関心が寄せられるのは当然でしょうが、手段（卵抜き方法）の選択は、良い結果（良質真珠の生成）の招来を前提とすべきであることを、いつも念頭において戴きたいと思つております。

真 珠 雑 感 (VI)

貝 掃 除

山 内 栄

貝掃除は真珠養殖の重要な一部門を占める作業であるが、それに要する費用・労力と云うものが非常に多く、今後の改良改善の望まれている作業の一つであります。

この貝掃除及び付着生物の事については、すでに多くの方々が発表されておられますので、こゝでは具体的に貝掃除に関する注意事項と改良改善の一私案を述べてみる事に致します。

— × × —

貝掃除は直接・間接的にアコヤガイの成長及びまき等を阻害する（極端な場合は貝を斃死させる）付着生物を取のぞく為に行うものですが、その場合、それらの付着生物をとりのぞくと云う利点の外に、貝掃除には貝の成長や真珠の

まきに悪影響を与えると云う缺点もあると云うことを先ず頭に入れておいて下さい。

理想から云えば、この様な缺点のある貝掃除の回数は出来るだけ少くすべきですし、貝掃除方法はその結果、貝が衰弱したり、悪影響を受けない様に改良しなければなりません。

〔注意事項〕

1) 貝の衰弱していない時期に貝掃除を行う事

貝掃除には利点と共に缺点もあるので、貝掃除の場合には、その缺点を出来るだけ少くする様に心がけねばなりません。その意味で、貝掃除は貝が貝掃除によつて与えられた缺点よりすくに立なおれる貝の元気な（衰弱していない）時期に行う様にすべきです。

貝廻し直後は貝が衰弱しているわけですし、直前はその後には貝廻しがあるのですから貝掃除はひかえるべきです。同様な意味で、水温の高い時期や水温の低い時期の様に環境水がアコヤガイにとつて好ましくない時期には貝掃除はさけるべきです。水温の点から云えば少くとも15℃以下、25℃以上と云う様な水温の時には貝掃除をさけるのが好ましいと思います。

2) 貝には出来るだけ衝撃を与えず丁寧に取扱う事

貝に刺戟を与えれば真珠のまきが良くなると考え、わざわざカゴを箆から屋形へ投げたりデバで貝を必要以上に叩いた様な時もありましたが、これは間違つた考えと云わねばなりません。

貝の乱暴な取扱いはたゞ単に貝を衰弱させるだけでなく、脱核や悪質真珠を作る原因にもなると考えられます。故に貝掃除の時には出来るだけ貝を丁寧に取扱うべきで、貝を投げたり、貝の足糸を引抜いたり、デバで貝を叩く様な事は避るべきです。貝の足糸を引抜いた場合を考えてみますと、それはたゞ単に貝の成長をおくらせる（アコヤガイの足糸切断と成長について3(10)参照）と云うだけでなく、体内の真珠袋にも相当強い影響を与えております。足糸はデバで切るべきですし、貝掃除はデバで撫る様に行うべきです。

3) 貝掃除は敏速に行う事

必要以上の貝を屋形に上げたり、貝掃除のすんだ貝を長時間屋形の上においておくと云う様な事をよく見かけますが、これは貝を衰弱させるだけで、それには何の利益もないのですから、貝掃除のすんだ貝は次ぎから次ぎへと箆に吊り、屋形には必要な貝だけを上げる様に心掛るべきです。

その様な事をしては仕事がかどらないと云われるかもしれませんが、少しの工夫で能率もさげずに行う事が出来ます。

4) 付着生物の付着盛期には貝掃除を行わない事

貝掃除をした貝殻と云うものは付着生物の付着する座（場所）として非常に適しており、付着生物が付着しやすい状態になつているのですから、付着盛期の貝掃除はさけるべきです。

例えば、フヂツボの付着期は英虞湾の場合は7月上・中旬ですが、この時期に貝掃除を行うとフヂツボがすぐに付着してしまいます。それに對し、5～6月頃に貝掃除を行うと、付着期までに貝殻に泥が付き、比較的フヂツボの付着をさける事が出来ます。

以上、現在一般に行われている所の貝掃除法についての私見を述べてみましたが、いずれにしても御自分の漁場の性質や貝の状態を十分に理解する事が必要で、その結果、初めて理想的な貝掃除と云うものが可能になるわけです。たゞ単に過去の経験とかんに頼り、その漁場や貝の事を理解もせず、たゞ機械的・習慣的に貝掃除する様な事は一日も早くなくする様にしたいものです。

〔改良改善策〕

現在の貝掃除は多くの費用と労力とを必要とするため、その改良改善が望まれ、色々な方法が試みられておりますが、今それらの方法をみてみますと大体次ぎの二つに大きく分類する事が出来ます。

- 1) 機械によつて短時間に多量の貝掃除を行う方法
- 2) 貝に付着生物が付着しない様にする方法

1の貝掃除の機械化は短時間に多量の貝を処分出来ると云うものゝ、貝に与える衝撃と云うものは無視出来ぬもので、それに要する費用の点でも一般化されにくいと云う缺点があります。

2に属する方法には多くのものがあり、それはさらに次ぎの様に分ける事が出来ます。

- イ) 貝殻にある種の溶液を塗布する方法
- ロ) 貝殻に泥や赤土を塗布する方法
- ハ) 付着生物の付着層をさけて貝を垂下する方法*
- ニ) 貝を空气中に露出しては付着生物を死滅させる方法**

* 付着生物には付着層と云うものがあり、その生物の多量に付着する層(水深)と云うものは、生物の種類によつて各漁場によりそれぞれ一定しているので、その時期にその付着層以外に貝を垂下する事によつて、ある程度、生物の付着をふせぐことが出来る。

** 貝を空气中に露出する事によつて付着生物が死滅する(付着初期のもので、大きく成長したものにはその様な事はない)のは、貝殻に付着している海水の水分が蒸発し、付着生物の環境が非常に高調になり、滲透圧の関係で死滅するものと考えられる。

イの方法の一例について御木本の井村氏が本誌四号に発表されておられますが、この種の方法はその溶液やそれに要する費用の点などに問題が残されております。

ロの方法は、貝殻に泥がついているとフヂソボなどが付着しにくいと云う事にヒントを得て行われた方法ですが、自然に付着した泥に比較して塗布したものは落ちやすく、あまり良い結果は得られておりませんし、それに要する労力と云うものも馬鹿に出来ないものです。

ハの方法はあまり行われておりませんが、実際問題として付着層以外の層がアコヤガイにとつて不適であつたり、手間がかゝり、多くの労力を要すると云う缺点があります。

ニは毎日一定時間、貝を空气中に露出する事により、付着生物を付着初期に殺すと云う方法で、各所で試験的に行われ好成績をあげた例もありますが、実際問題としては多量の貝を毎日上げると云う事がなかなか面倒であり、又手間もかゝると云う缺点があります。

以上の方法には何れもなんらかの缺点があり、広く実用化はされておられません。

一 私案

私の考えている貝掃除法は付着生物のあまり付着しない時期に従来通りの方法の貝掃除を一度だけ行い、その後は出来るだけ泥を貝殻につける様にし、その間にニの方法を利用すると云うものです。

即ち、従来通りの貝掃除の後は屋形に水槽を作り、その中に過飽和食塩水※※※を入れ、上げてきた貝を金網ともその中に漬け、その後屋形に2・30分間おき、再び貝を海に垂下すると云う事を一月に1・2回、2・3日続けて行くと云う方法で（環境条件の悪い、貝の衰弱している時はさける。又付着盛期には回数をふやして行います）、その場合、金網がよごれている様な時には貝についている泥を落さない様に注意し、貝に付着している大きな付着生物だけを手でとり、金網を新しいものとりかえる様にします。

この方法は冬のぞき、大体利用出来るわけで、従来の様な貝掃除は1年に2回、春に行えば良いわけです。

一寸考えると仲々面倒な様ですが、その手順さえ工夫すれば、簡単に能率的

※※※ 水の中に塩を入れた場合、最初の内は、塩は水にどんどんとけるが、ある程度以上に塩を入れるとけず塩が下にたまる様になる。その場合にその水の事を過飽和食塩水と云う。実際には海水に岩塩でも入れて作れば良いわけで、この過飽和食塩水を用いる方法はアメリカでカキの付着生物をふせぐ場合に用いられている。

に行う事が出来ると思います。たゞこの場合、付着生物の付着時期の把握が大切です。

この案はたゞ単なる机の上の空論かもしれませんが、これが何かの参考、ヒントになれば幸いです。

良い真珠を作るには貝掃除の時、貝に強い衝撃を与えない事と不自然な状態におかない事が大切だと云う事をわすれないで下さい。

真珠研究会九州部会に出席して*

太 田 繁

真珠研究会九州部会が3月18日に開催されることになり、同会より伊勢部会に講師派遣方の依頼があつたので伊原（全国真珠養殖漁協）・青木（富士真珠）の兩氏と私が派遣された。

長崎県の真珠養殖はその歴史も古く同地方独特のすぐれた養殖技術もあり、漁場が広大でしかも優秀なことゝ相俟つて名実ともに三重県に次ぐ養殖県であるがなんと言つても真珠養殖の大祖である三重県と遠く離れている上に県内でも漁場が五島・壹岐・對馬海区と非常に広範囲に分散しているために業者相互間の技術交流の機会にも乏しく、その大多数の人達にとっては自分の研究以外には国研大村支所より発行されている『しんじゆ』と本誌が唯一の技術改良の窓口になつている様な状態である。

九州部会に招かれてわれわれが大村駅に着くと同会の西村会長が出迎えに出ておられたが、たまたま数日前に市内に真性天然痘患者が発生し集会等はさし控える様にとの達しもあり、会期を変更しようとも考えたが何分にも突発的な事で遠方から来る人には今更変更の通知をしても間にあわず、開会が懸念される状態であるとの話にわれわれも折角遠方から来たことではあり心配をしていたが当日になると前夜から待機しておられた離島の人達をはじめ続々と出席され、定刻の10時には約120名も参集され会場である養殖漁協の二階は膨れあがらんばかりの盛況となつた。

* 1959年4月1日受理

開会に当り、止むを得ぬ事情で出席することの出来なかつた伊勢部会の幹事に代つて私が伊勢部会の研究活動の状況を簡単に話し、併せて将来九州部会との合同研究といった様な研究会も開催したい希望のあることを伝えてから下記の演題で講師の話に移り、さすが日本の西の果である長崎も夕靄につままれる頃に閉会になつた。

われわれは講演に先きだち、出来るだけ話題の提供者になり、話をしながらお互に考え疑問の点は問い質す様な雰囲気にもつてゆく計画であつたが出席者の方達には又とない機会であるから出来るだけ沢山の話を聞き度いという心組みがうかゞわれ、この計画は失敗に終つたが出席のために片道3日もかゝる人達のことも考えるとこれも又止むを得ぬことであると思つている。

今年は第二回目の研究会であつたが昨年第一回には高山所長・田辺・田畑氏等が講師として出席され、大きな成果を残されたため今年も前記の如き悪条件があつたのにもかゝらず非常に盛会であつたことはわれわれの遠路の疲れも一度に吹ツ飛んでしまつた。

各講師の話は伊勢部会の方々にも大変参考になると思われるので順次本誌に発表をしていただく様に各講師並びに本誌編集者にお願してあるのでこゝでは割愛し、報告を終えたいと思うが伊勢・九州兩部会にたゞ第三者として欲を言えば、

- (1) この様な研究会を年に2回開催されたい。
- (2) 九州にもすぐれた養殖技術があるから年に1回位は九州部会から講師を伊勢部会に招いていたゞきたい。
- (3) 若い人達が熱心に技術の研究をしておられるがこの若い人達と養殖技術のみならず、真珠業界の現況とか日本の特産物である真珠の正しい養殖のあり方等についても真剣に話し合う機会が欲しい。

ということである。

記

1. 大村支所から本所に転勤して三重県の養殖技術を見て感じた点について
太 田
2. アコヤガイの衰弱について
太 田
3. 足糸の切断回数と成長の関係
蓮 尾 (支所長)
4. 卵抜きがアコヤガイの健康状態並びに真珠の品質に及ぼす影響
蓮 尾
5. 挿核技術について (主として挿核部位と異常形真珠の成因について)
青 木

- | | | |
|----------------------------------|----------|-----|
| 6. 真珠の構造及び卵抜きと生殖細胞についてのスライドによる説明 | | 太 田 |
| 7. 低比重海水の真珠の品質に及ぼす影響 | 片 田 (支所) | |
| 8. 長崎県における化粧巻き漁場の海況と真珠の品質について | 片 田 (支所) | |
| 9. 税務対策について | | 伊 原 |

養殖業界時事ニュース

もめる志摩総合開発中間報告

代替地がない仕上漁場

振興会反対実証あげ懸命

志摩半島総合開発計画は、昭和31年より農林省農地局計画部と京都農地事務局が特殊土地利用直轄地域として指定を行い、工費26億円の予算で準備されているが、当時これに対して、全国漁協組で反対陳情を行なったが、このほど、同計画をめぐる中間報告として、振興会は、次の如くその要旨をとりまとめた。

同計画に対してはその後、真珠養殖業者にも反対があるところから関係当局は学識経験者の意見を求めていたがその結果、悪影響を心配するには当たらない。むしろこの計画によつて、鳥羽方面からのプランクトンが多量に的矢湾に流入するので、真珠のためには現在よりかえつて良いといつた説もあり、また、化粧巻漁場の代替地もあるのだから、農地局としては既定の方針通り計画を進めるといつた方向に動きつゝある。

こゝで全国漁協組、および的矢湾関係養殖業者が、的矢湾養蠔研究所長佐藤忠勇氏による実証資料と高山真珠研究所長の意見を基に、優秀漁場の埋め立てを行なう同計画絶対反対の態度を明らかにした。すなわち

1. 埋め立が行なわれると、湾奥の伊雑の浦はポンプ的な作用する潮汐と湾奥、湾外間の比重差による、海水の循環運動が阻止されてしまい、母貝の発育が悪くなり、同時に品質、色沢に悪影響をおよぼす。特に、的矢湾は色沢が良く巻きが速いと云うことにより、養殖期間の長い、中、大珠の仕上げ漁場として最適であつたが、これと同じ条件の仕上げ漁場は他にはない。

1. 的矢湾の水温は夏高冬低の典型的な内湾性を示す。躍層より下層は秋には水温降下の勾配は急であるが、冬期水温は比較的高く、夏の水温は平均26度から27度で年交比は少なく16度から17度で外海性に近い性格をもつ。

1. 年間を通じ出水後をのぞいては、プランクトンの量も多く、特に春より夏の間によく幼生プランクトンの出現もすこぶる多い。また夏と冬、特に夏には毎年定期的に植物性プランクトンの大増殖が現われる。

1. この湾の栄養は、受水面積のすべてをしめて、しかも肥沃な耕地である流域をもつて湾奥に注いでいる河川よりの陸水と、伊勢湾水の流れている湾外より供給され、栄養塩類はこの湾独特の潮流現象によつて伊雑ノ浦、湾部、湾外等の各水域においてよく混合し、こゝにおいて透明度の高い湾部、湾外で、プランクトンの繁殖が促進される結果となる。

また、海底に沈着していた養殖貝の排泄物とか、湾内懸濁物質とかも、下層のはげしい流れによつて伊雑ノ浦に運ばれ、こゝで豊富な日光等によつて分解され、干潮の上層流により湾部の方に流出する。このことも貝類の発育、栄養を助ける重要な現象である。

あくまで計画は実施

地元側と話し合いの用意あり

これに對し農地局側では3年程前から調査を実施して来ているが、これは開発計画実施の可能性を確める範囲のもので、初年度でも見込みさえつけば、調査をうちきつて、実施することになるが、今のところ34年度に調査を行なう予定ではあるが、現在までの調査の結果、すでに開発計画実施の可能性を有するという結論を得た模様で同計画の実施は決定的と見られる。

また、この問題によつて直接影響を受ける水産業者、真珠業者との調整は、現地における関係者、すなわち地元と県当局、および農地事務局との間で話し合いをした上解決をはかりたい意向で、農地局と水産庁当局との話し合いはあくまでも第二次的なものとしている様である。

また、現在まで農地局が、水産関係者との話し合いを行なわなかつたという点については、調査計画を実施するという段階は、土地改良法の法域内で行なえ

る範囲のものであるし、こゝまでの段階では周囲に影響をおよぼすことはないと考えた上でのごことであろうが、あまり計画がすまないうちに時期をみて相談するものと見られるので、全国漁協組の松尾組合長から、国家的な立場から利害得失を十分に検討して、納得の行くような措置をとるようにと、積極的な要望を行なつた。

また、同時期に水産庁当局からも左の如き申し入れを行なつている。

1. 真珠養殖業者の反対は、単なる補償金欲しさの反対ではない。
2. 的矢湾の漁場の特殊性がもたらす環境要因について、学者間にも意見の喰い違いがあるようだが、検討材料としては佐藤の矢湾養蠔研究所長の研究報告が唯一のものと考えられ、この内容について、相互に検討する機会をつくりたい。
3. 利害関係については総合的な立場から十分に検討してほしい。

この反面、伊雑ノ浦の淡水化という形の土地改良案は、必ずしも良案であるといえない面があり、五十鈴川上流の水で大部分の水量をまかない、神路、池勾川の水は極く一部分だけという立案もあるようであり、農地局としても、地元水産関係者の強い反対に会つても強いて、実行というほどの良案でないところから慎重を期しているようである。

なお、この問題について、地元の農民は、同計画が実現すれば無料で農地が手に入るとか土地改良を無料ですることでもできると考えているむきも多いようであるが、実際には県と地元が全体の40%から70%の金額を負担することになるわけで、これらの事情が双方にはつきりした場合はまた、この問題に一波乱起るものと予想され、今後どのように発展するか、問題である。(以上振興会の調査による)

(真珠新聞第184号)

9,000貫、63億の外貨獲得

輸出実績戦前戦後の最高記録

日本真珠輸出組合では昭和33年(1月から12月)の真珠輸出実績をこの程集計し発表した。それによると33年1カ年間の総輸出数量は8,956貫481匁36となり金額にして1,7684,960ドル80セント(約63億円)という真珠業界始まつて以来、戦前、戦後を通じて最高記録を作つた。

この輸出の伸長を32年1年間の輸出数量と對比すると、前年6,951貫、1,649
8,000ドルで、昨年はこれを約7%上回る成績を示している。

これを輸出形態別にみると、通系連が6,087貫で67.9%金額にして1,215,000
ドル、68.75%バラ珠1,928貫、21.52%金額4142,000ドル、23.42%、 $\frac{3}{4}$ 889貫、
9.93%、金額1111,000ドル6.28%、 $\frac{1}{2}$ は53貫0.59%、金額274,000ドルで1.55
%となつており、31年に比して通系連の増加が目立つている。

また仕向地別では、依然として米国が第一位を占め、総輸出額の58%、次い
でスイス、11%、西ドイツ、6.7%となつており33年の著しい特徴は英国、カ
ナダの増加に對して、フランス、インドなどの減少であつた。

これは、フランス経済事情の不安定および、粗悪真珠輸出禁止にともない、
今まで主にインド向け低廉価のものが規制されたためであると思われる。

なお、8月の輸出が減少するということがこの商品の特殊性により例年見ら
れるのだが昨年は逆に著しい増加を示しており、これは輸出グレード引上げの
予定が10月であつたところから、これを前に、買急ぎ、売急ぎが行なわれた結
果とみられる。

しかし、総輸出数量の伸びに反して、その単価は1匁当り平均1ドル97セン
トで、32年の1匁当り2ドル37セントより40セントの値下りを示しているが、
こゝに今後の問題があらう。(真珠新聞第184号)

筏台数制限を新規制

府県別施術目標決る

農林省は13日、昭和34年度真珠貝施術数量目標を告示した。これは、先頃行
なわれた真珠養殖事業審議会の答申にもとづくもので33年目標6,930万個を大
巾に上回っている。これは昨年の輸出が非常に良好で、上昇している真珠の需
要に、当てるためとみられる。

なお、既報の如く数量目標の達成及び品質の維持向上をはかるための措置と
して34年度より新たに府県別施術数量に見合う筏台数を定め、漁業権の条
件、及び制限として指示することとなつた。

府県別、サイズ別施術数量目標の詳細は次表の如くである。

昭和34年度真珠貝施術数量目標

区 府	分 県	計 千個	大 珠 千個	中 珠 千個	小厘珠 千個	見合筏数
神奈川		80	—	—	80	36
石川		100	—	—	100	45
福井		340	16	126	198	153
静岡		1,730	48	599	1,083	779
愛知		195	20	60	115	88
三重		35,000	5,250	10,500	19,250	15,750
京都		220	8	56	156	99
兵庫		1,420	195	365	860	639
和歌山		6,420	946	2,992	2,482	2,889
島根		20	7	13	—	9
広島		1,750	231	880	639	788
山口		600	61	220	319	270
徳島		2,220	191	906	1,123	999
香川		450	93	218	139	203
愛媛		8,754	2,162	4,561	2,031	3,939
高知		2,385	1,042	828	515	1,073
佐賀		1,300	243	586	471	585
長崎		15,000	3,180	6,780	5,040	6,750
熊本		3,055	761	1,512	782	1,375
大分		2,610	773	1,078	259	1,175
宮崎		170	134	136	—	77
鹿児島		270	—	99	171	122
計		84,089	15,261	32,515	36,313	37,843
比率(%)		100	18.1	38.9	43.2	

(真珠新聞第184号)





1、第3回幹事会

33年度決算を間近に控え、第3回幹事会を2月25日午後1時より真珠会館に於いて開催した。

本年度最後の会合のため、主として来る総会の議案について案を作成し、午後4時半閉会し、引続いて懇談会を行つた。

挨拶 佐藤代表幹事
司会 山本幹事

1. 33年度業務報告

総務 山本幹事
編輯海洋 白井幹事
経営研 久米村幹事
基礎研 阿部幹事
会計 中村幹事

2. 34年度機構改革案 佐藤幹事

3. 新役員選出方法について //

4. 新年度事業計画 山本幹事

- (1) 経営分科会
- (2) 基礎研究分科会
- (3) 海洋調査分科会
- (4) 実態調査委員会
- (5) 試験養殖
- (6) 編輯
- (7) 例会
- (8) リクリエーション
- (9) 品評会
- (10) 会費

5. 其の他

- (1) 原稿、其の他謝礼について
- (2) 会費徴集について
- (3) 会員の再整理について

(4) 3月例会について

(5) 九州研究会への講師派遣について

(出席者)

全国真珠：伊原、高橋

国 研：太田

和 具：宮内（水産高校）

片 田：茶木（片田中学）

松本（覚田真珠）

的 矢：笹原（富士真珠）

鳥 羽：堤（共栄水産）

立 神：加藤（加藤真珠）

浜 島：青木（富士真珠）

布 施 田：田辺（中又真珠）

五ヶ所：幸田、西井

南 海：中村（中甚真珠）

研究会：佐藤、山本(一)、山本(文)、久米村、阿部、丸山、中村、
白井、谷

2. 3月研究発表会

33年度、最後の研究会は3月20日、午前10時より伊勢市真珠会館に於いて開催された。

既に新年度の養殖時期が始まり、忙しくなりつゝあつたが、多くの人々が参集され盛会であつた。

議 題

1. 真珠養殖技術と経営の発展について

水産研究会会長 浅野長英氏

〃 八木氏

〃 秋谷氏

2. 33年度共販の現況と今後の見通しについて

全国真珠漁協組合長 松尾圭起氏

3. クズ珠の形成とその防止法に対する1つの考案

県立三重大学水産学部講師 辻井 禎氏

午前中は昨年度振興会より委嘱をうけて実施せられた「真珠養殖業の生産構造」についての研究成果報告を東京の水産研究会の代表者の方々により発表せられ非常な参考を得たのであつた。

午後は折から審議会に御出席中の松尾組合長にお願いして、真珠界の現況と問題点につき、お話を頂き、次いで業者の関心の深い、クズ珠形成防止法という画期的な実験の紹介を辻井氏から伺つて、午後4時閉会した。

尚、当日昼には計画中の「真珠用語辞典」の最終編輯打合せを行つた。

雑 報

1. 交換資料御礼

長崎県水産試験場：五島灘並にその周辺調査 24、25、27号

〃：大村湾調査 21、29号

北海道水産試験場：別刷 2

東北大学浅虫臨海実験所報告：実験所報告 9 (2)

輸 出 組 合：輸出実績 (12月、1月)

〃：個人別輸出実績

国立真珠研究所大村支所：「しんじゆ」 No.38, No.39

真 珠 新 聞 社：真珠新聞

水 産 経 済 新 聞 社：日刊水産経済新聞

三重県立水産高校：真珠養殖入門1冊、その他資料

西海区水産研究所：研究報告、第16号

日 本 真 珠 研 究 所：研究所報告集、第3号

輸 出 検 査 所：輸出検査実績 (12月、1月)



第 2 期 決 算 報 告

貸 借 対 照 表

(昭和34年3月31日現在)

借 方		貸 方	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
現 金	114,612 <small>円</small>	仮 受 金	132,000 <small>円</small>
当 座 預 金	12,195	未 払 金	160,000
普 通 預 金	240,759	前 期 繰 越 金	131,849
什 器 備 品	101,980	次 期 繰 越 金	146,437
仮 払 金	43,740		
未 収 賦 課 金	57,000		
合 計	570,286	合 計	570,286

損 益 計 算 書

(自昭和33年4月1日 至昭和34年3月31日)

損 失 之 部		利 益 之 部	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
印 刷 費	682,220 <small>円</small>	受 入 賦 課 金	443,000 <small>円</small>
例 会 費	112,130	雑 収 入	82,538
消 耗 品 費	8,139	補 助 金	600,000
通 信 費	62,431	利 息	3,409
旅 費 交 通 費	46,960		
公 課	300		
海 洋 調 査 費	10,000		
基 礎 研 究 費	2,200		
会 議 費	13,040		
雑 費	27,090		
雑 損 失	18,000		
次 期 繰 越 金	146,437		
合 計	1,128,947	合 計	1,128,947

財 産 目 録

(昭和34年3月31日現在)

科 目	摘 要	金 額
現 金	手 許 有 高	114,612 ^円
当 座 預 金	百 五 銀 行 預 入	12,195
普 通 預 金	勤 業 銀 行 預 入	240,759
什 器 備 品	テープレコーダーその他	101,980
仮 払 金	立 替 金	43,740
未 収 賦 課 金	会 費 未 収 分	57,000
合 計		570,286

第 3 期

昭和34年度收支予算書

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	摘 要	金 額	科 目	摘 要	金 額
受入賦課金	会 費 受 入 660,000円 年額2,000円 330名 前年度未収分 263,000円	923,000 ^円	印 刷 費	パンフレット 印 刷	660,000 ^円
補 助 金	真珠振興会 より受入 月額50,000円	600,000	例 会 費	会 合 費 用	250,000
			消 耗 品 費	事 務 費	20,000
			通 信 費		90,000
			旅 費 交 通 費		100,000
			雑 費		50,000
			公 課		1,000
			会 議 費		50,000
			予 備 費		302,000
合 計		1,523,000	合 計		1,523,000

(注) 予備費302,000は収入の部の会費未収分263,000が収納されれば試験養殖の費用に充当するもの



編
集
後
記

○3巻の最終号をこゝにお届け致します。

毎月遅れ乍らも、どうやら発刊出き昨年より内容も体裁もよくなつた事は寄稿者各位の御理解と御協力のお蔭であり、厚く御礼申し上げます。

○通覧してみると本文の大部分は国立真珠研究所の方々の解説的なものが多く、業者には参考書となつているのでその点では喜ばれているのですが、年々真珠養殖も研究される様になつているので、特に新年度は業者各位の生のレポートを沢山お寄せ下さる様希望しております。どうか、型にはまつた原稿でなくとも結構ですからお願い致します。(S)

昭和34年3月31日発行

第3巻 第11号会報 (非売品)
(通巻第20号)

編集者 白 井 祥 平

三重県伊勢市岩淵町84番地ノ2

真珠会館内

発行所 真珠研究会伊勢部会
電話(伊勢局代表)4147番

三重県伊勢市岩淵町140

印刷所 神都印刷株式会社
電話(伊勢局)2230番